
ガラス容器の中から

絵爾久万

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガラス容器の中から

【Nコード】

N3545C

【作者名】

絵爾久万

【あらすじ】

夏の夜祭り気が付くと僕は芝居小屋の中に入っていた。舞台の上では身体に蛇を巻き付けたバレリーナが踊っていた。バレリーナは蛇の首を食いちぎり真っ赤なベロを出して笑った。

（前書き）

ケータイサイト
「みんなの広場」
8月入選作
1ヶ月間
掲載されます。

【乗換案内】
↓
【読書の時間】

家の前の通りでは人の往来がいつもより賑やかだ。万灯を担ぐ男たちのざわめきと共に、笛や太鼓の音が鳴り響いてくる。

今夜は鬼子母神の夜祭りだ。

毎年家族で出かける。僕はパパとママに手を繋がれ鬼子母神までの道を3人並んで歩いて行く。歩く脚が自然とぴょんぴょん跳ね上がる。

あんまりはしゃぐとママは怒るけど、嬉しいからとまらない。怒っていても、浴衣姿のママの顔は笑ってる。僕を見下ろすパパの顔も笑っている。

シーンと静まり返った部屋の中に笛や太鼓の音が一層大きく鳴り響く。テーブルの上には食べかけのカップラーメンの容器がひとつ。

去年の暮れ、雪の降る寒い日にパパが家を出て行った。

家族揃ってお祭りに行くことももうない。

ママは僕を食べさせていくために、近くの病院で働きはじめた。夜勤があるから、三日に一度僕はひとりで夜を過ごす。ママは疲れているから、以前のようにあまり笑うこともなくなった。

僕は毎朝ひとりで起きて、ひとりで学校へ行く。起きても学校へ行きたくない日は休んだ。僕は学校をよく休むようになった。中学生になってからはほとんど行っていない。

祭りばやしの賑やかな音が、部屋の静けさをより一層際立たせた。外に出た。僕の足は勝手に神社の方向へ向かった。楽しそうな家連れの姿を見て、僕はぐっと奥歯を食い縛った。

パパが家を出て行った時も僕は奥歯をぐっと食い縛った。奥歯を力いっぱい喰い縛ると涙をこらえる事が出来る。

参道の両側には夜店が並んでいた。

入り口の所にわた飴屋、少し行つてあんず飴、金魚すくい、輪投げ。去年と何も変わっていない。変わったのは僕がひとりだつて言うこと。

輪投げ屋の賞品棚に、きらきら光る真つ白なハンドバッグが飾られていた。ママへのおみやげだ。僕は百円玉をいくつも投げ輪に交換し、白いバッグめがけて輪を投げた。しかし全て外れ。ついには店員が同情して豚の貯金箱をくれた。

奥社の方へ歩いて行くと、何やら奇妙な音色の音楽が流れてきた。

参道の脇の大きな松ノ木の裏に芝居小屋が建っていた。

入り口の看板にはろくろ首、身体に大蛇を巻きつけたバレリーナ、恐ろしい化け物の絵がたくさん描かれていた。身体の奥がぞくぞくつとした。

気が付くと僕は芝居小屋の中に入っていた。

奥の方から観客のざわめきが聞こえてくる。恐ろしくなり戻ろうとしたけど後ろからどんな人が入ってきて、戻る事もできなくなつた。

舞台の上では身体に蛇を巻き付けたバレリーナが踊っていた。バレリーナは蛇を両手で引き伸ばすとその頭を喰いちぎり、観客の方へ投げつけた。観客席から大きな悲鳴があがった。バレリーナは蛇の首を啜え生血を啜った。そして観客に向かい真つ赤な歯を出して笑った。

次に出てきたのは首だけの女。4本足のテーブルの上に金髪の女の首が載せられている。テーブルの下に見えるのは後ろの壁だけ。首だけの女は悲しそうな声で歌を唄った。

舞台の中央に小人のピエロが出てきた。

「それでは最後に河童のカー君のご挨拶」

ドロドロと太鼓がなる。舞台の中央の小さな穴から白い煙が出てく

る。

と、一瞬河童の縫いぐるみが顔を出しすぐにまた引つ込んだ。

「今夜は河童のカー君ご機嫌斜めのような。はい、それでは今日は此処まで。お代は出口で払ってってくださいよ。大人千円、子供6百円」

入口の方からは新たな客がどんどん入ってくる。

観客の間から口々に不満の声があがるが、出口には厳つい体躯の男がふたり立っている。不平を言っていた客もしぶしぶ入場料を払って出て行く。

僕の財布には百円玉が3個しか入っていなかった。脇の下から冷たい汗が流れた。強面の男ふたり、どう考えても負けてはくれそうにない。

僕は家族連れの客に紛れて出口を通り抜けた。と、思った瞬間首根っこを捕まれ、そのまま楽屋裏に連れて行かれた。

「お金を払わないで帰ろうとしたんだって？」団長が奥の椅子に座って言った。

「す、すいません。これしかないんです」僕は台の上に財布の中身を広げた。

「それだけじゃ足りないなあ。しばらくここで働いてもらうしかないな」

「働くって？」僕はもうビビりまくっていた。

「河童の人氣がいまいちでなあ。ちょうどいい大きさだ」

団長がそう言うと、僕はふたりの男に担がれ台の上に寝かされた。

足元には斧を担いだ。ピエロが立っている。僕はふたりの大男に両手両足を押さえつけられ逃げ出すこともできない。

「やれい！」団長の掛け声でピエロが斧を振り上げた。僕は思いつき奥歯を噛みしめた。ドスツと鈍い音がした。

頭を持ち上げて見ると僕の右足はぶつとりと太腿の付け根で切られていた。見ているそばから左脚にも斧が振り下ろされた。頭がふわ

つとなった。次に両腕に斧が振り下ろされた。

ピエロが僕の顔に近づいて来た。口の両端から糸のようにだれを垂らしている。ピエロはまた斧を振り上げた。僕は歯を食い縛り眼を瞑った。顎の下にガツンと衝撃を感じた。

気が付くと目の前に五体バラバラになった僕の身体が転がっていた。まるで分解された人形のような。頭がふわふわしたけど不思議と意識はあった。僕は団長に聞いてみた。

「どうしてこんなにバラバラにしたんだい？」

「お前を入れる手ごろな容器がなかったからさ」

団長は僕の頭のとっぺんをバリカンで刈りながら顔を近づけて言った。

その後僕は緑の液体が入った六つのガラス容器の中にバラバラに入れた。緑の液体はやがて透明になり皮膚だけが緑色に染まった。学校の先生や友達はどうでもよかったが、もう、ママに会えないのかと思うと悲しくなった。

不思議なことには多くの意識は途切れることはなかった。胴体がないからお腹も空かない、狭い容器の中だけど手足がないから痺れることもない。

よくよく考えてみれば学校へ行かなくていい訳だし、奇妙な姿の生き物が目の前を通り過ぎていくのを見ているだけでも楽しかった。

団員と一緒に北は北海道から南は沖縄まで日本全国あちこち渡り歩いた。

と言っても僕は容器の中、何をする必要もない。ものぐさの僕はそんなガラス容器の中の生活をすぐに気に入った。

月日は経ち、僕はまた見慣れた懐かしい場所に戻って来た。

ススキミミズク、たくさんの紅い提灯をぶら下げた万灯。鬼子母神の夜祭りだ。

僕は人寄せのため芝居小屋の入りに並べられた。河童のカー君の標本として。大勢の人が興味深げにガラス容器を覗き込んで行く。僕は人気者になった気分だった。時々、ウイंकをしたり、ベロを出してやるとみんな驚いて逃げて行った。僕は面白くて仕方なかった。

ある日3人の家族連れがやってきた。小さな赤ん坊が父親と母親に手を引かれている。母親の着ている浴衣の柄には見覚えがあった。母親は赤ん坊を抱いてガラス容器に近づいてきた。僕は一瞬心臓が止まるかと思った。

ママだ。僕のママに間違いなかった。

「ママー!!」僕は大声で叫んだ。

しかし容器の中の僕の声はママには届かなかった。赤ん坊が僕の顔を見て泣き出した。

「どうせ造り物だろ」隣りの男が言った。

3人は手を繋ぎ僕の前を通り過ぎて行った。

きつとママは再婚したんだ。

僕は悲しくなった。でもママはとても幸せそうな顔をしていた。もう二度とママと手を繋ぐことはできないけど、ママが幸せならいいんだ。僕はそう思った。

涙が溢れてきた。もう齒を食い縛る必要はなかった。涙はすぐに溶液と混ざり合う。僕は誰にも気付かれずひっそりと泣いた。

ガラス容器の中で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3545c/>

ガラス容器の中から

2010年12月10日02時09分発行